コミュニティ・スクール検討委員会　議事録（第１０回検討委員会）

◆日　　時　令和元年１２月２６日（木）午後３時００分から

◆場　　所　青葉区役所４階第１会議室

◆出席委員

氏　　名	現　　職　　等	備　　考
水谷　　修	東北学院大学 教養学部長	委員長
梨本 雄太郎	宮城教育大学教職大学院 教授	副委員長
大内 ユカリ	仙台市立幸町中学校 ＰＴＡ会長	
數本　芳行	仙台市立上杉山中学校 校長	
今野　孝一	仙台市立上杉山通小学校 校長	
島田　福男	仙台市連合町内会長会 副会長	
千田　初男	愛子の森ハグリッズ　運営委員長	
山川 由紀子	西中田小学校学校支援地域本部 西中田こみこみスクール スーパーバイザー	
山口　裕子	仙台市立沖野小学校ＰＴＡ会長	欠席
横山　倫子	高森中学校区学校支援地域本部 スーパーバイザー	

◆配付資料

次第

委員名簿

資料１　地域とともにある学校づくり推進フォーラム in 東京　視察資料

　　時間割表・配付資料・参加報告

資料２　コミュニティ・スクール検討委員会（報告）　　（案）

参考資料　第９回コミュニティ・スクール議事録

◆会議概要

１　開　会

２　報告・議事

（１）　令和元年度「地域とともにある学校づくり推進フォーラム in 東京」について（報告）

事務局（田村）より概要説明

資料説明・参加報告書をもとに説明

梨本副委員長：

・コミュニティ・スクールは何のために必要か。ダイバーシティ（多様性）の時代である。

・学校の事務職員がコミュニティ・スクールのつなぎ役として関わっている事例紹介。

・既存の組織を生かしてつないでいくこと。ボランティアの役割を細分化して、参加へのハードルを下げる。

數本委員：

・とちぎ未来アシストネットの事例、本組織を基盤にして、コミュニティ・スクールを導入

し、学校コーディネーター（教職員）と地域コーディネーター（地域住民）を配置した。

・実践する中で熟議を通して、目標・ビジョンが共有され、主体的な参画が生まれ、協働により自己効力感が向上した。

・「１５歳（中学生）は地域の担い手」を最終的なゴールとした地域貢献活動を実践した。

千田委員：

・学校運営協議会の委員の選出が重要である。弁護士も委員に入っている。

・本市の学校支援地域本部活動で実践しているような内容であり、本市のポテンシャルの高さを改めて感じた。

・周囲の雰囲気で、コンセプトもはっきりしないまま立ち上げたところは停滞している。地域の実情に合った活動を粛々と行っていくことが大事である。

・コミュニティ・スクールと地域学校協働活動は両輪となって進めていくことが大事である。そのハンドルを握るのは校長である。

多賀野主幹：

・講師（ＣＳマイスター）のキャラクターが違うと、こんなにも見方が変わるのかということを実感した。

・校長として、コミュニティ・スクールをマネジメントすることが必要性である。

・地域の中の複数の学校で一つの協議会をつくろうとすると学校課題が違うので、なかなかうまくいかない。

（２） コミュニティ・スクール検討委員会　報告（案）について

事務局（丸山）より資料説明

５　検討内容　報告書(案)p.23～

（１）本市でのコミュニティ・スクール導入について　報告書(案)p.23～

水谷委員長：これまでの検討委員会の議事にもあったが、「本市のすべての公立学校・幼稚園がコミュニティ・スクールになることを目指す。」と言い切る形でよいか。

今野委員：この部分が本報告書の肝となる部分である。文章が長すぎるので、一番伝えたいところ（下から12行目～）を特出しする形にするとよい。また、「コミュニティ・スクールになることを目指す。」の表現は、「教育委員会としては、すべての公立学校・幼稚園がコミュニティ・スクールになることを目指すのが、望ましい。」といった表現ではどうか。この表現の方が検討委員会で検討した内容の報告になるのではないか。また、この報告書では、スケジュール感が全く見えない。どのような道筋で進めていくのかは、校長が一番心配しているところである。

水谷委員長：「できるところから進めていく」という趣旨で書かれているのはわかるが、スケジュール感に関しては検討委員会で決めていいものか。

事務局（田辺）：文章が長いので端的に示すように修正を行う。スケジュール感に関しては、検討委員会の報告書を受け、事務局で制度設計を行い、具体的なスケジュールを示して行く予定である。

水谷委員長：制度設計やスケジュールまでは、本検討委員会では踏み込めないが検討委員会としてどこまでの表現をするか。

數本委員：コミュニティ・スクールになることによって、このようなメリットがあり、学校にとっても、地域にとってもよい効果が見られるため、すべての学校・園がコミュニティ・スクールになることを目指すということを検討委員会として報告できればよいのではないか。

今野委員：校長がこの報告書を見たときに、すべての学校がコミュニティ・スクールになることはわかるが、「できるところから」と言われると先が見えない。例えば、モデル校を指定して実践を行い、その検証を行いながら、やり方や成果を市内の学校に周知することで、すべての学校をコミュニティ・スクールに移行するというような、道筋があると、学校現場としてはありがたい。

事務局（田辺）：事務局では、報告書の作成と並行し、制度設計と導入のスケジュール作成している。校長に報告書を提示するとともに、制度設計と導入スケジュールを提示する。

島田委員：「導入可能なところから」という表現は、学校や地域の状況が違うため、適切な表現だと思う。しかし、こう書いた場合、ほとんどの学校が様子見をするのではないかと考える。校長は何年かで転勤・退職してしまう。また、地域もやるぞと盛り上がっても、４・５年経つと町内会のスタッフも入れ替わってしまうため、やる気もどこかにいってしまう。難しいところではあるが、先進校がないと、広まらないのではないか。ある程度の設定目標は必要であり、もう少し強い表現が必要であると考える。

山川委員：「自分が校長のうちはこのままでよいのではないか。」と各校の校長が考えないか心配である。「やれるところから」という表現は、学校がやれると思うのか、または地域がやってほしいと思っているのか、どちらかわからない。例えば、「コミュニティ・スクールになるように努力する。」というような、もう少し強い表現をした方がよいのではないか。

梨本副委員長：何年後にという表現は難しいが、コミュニティ・スクールの導入に対する学校と地域の話し合いを進めるように、どんな体制で何を目指すのかを検討するようにしていくことが重要である。学校と保護者・地域で議論を始めて、すぐコミュニティ・スクールを立ち上げられる地域もあれば、時間がかかる地域があると考える。なるべく早くコミュニティ・スクール導入に向けての話し合いを進めることを記載してはどうか。

水谷委員長：コミュニティ・スクールになるための道筋、段取りを書き込めればよいと考える。

事務局（杉山）：検討委員会から報告書をいただき、コミュニティ・スクール事業を進めるのは、事務局である。報告の中に、教育委員会の役割として、コミュニティ・スクールの導入に向け、地域に周知すること等の表現を記載していくことがよいと考える。

數本委員：フォーラムの報告書にも「教育委員会での役割」を記載した。私の報告書のラウンド３の１１番に、教育委員会内の連携が必要であること等が記載されているので、参考にして欲しい。

水谷委員長：教育委員会の役割を明記する方向で修正を願う。

（３） 仙台版コミュニティ・スクールの５つの視点

視点１　社会総掛かりで子どもたちを育てる体制づくりへ　報告書(案)p.24～

梨本副委員長：前回の会議の意見を盛り込み、本市の育む子ども像を入れながら、説明を加えている部分は評価できるが、「学習観」については、まだ盛り込まれていない。教え方、学びの支援の仕方が変わってくることを記載する必要がある。知識を蓄積するだけの学習なら、地域の協力は必要ない。身に付けた知識を活用するような体験型の学び、探求型の学びのような答えの見えない学びを実践する中で、子どもたちは学びの喜びを感じ、大きく成長していく。そのために地域の力が必要であり、社会総掛かりでの教育につながっていくことを記載するべきである。

今野委員：仙台市としてやるのであれば、構成として仙台市教育振興基本計画をもっと前に記載するべきである。

水谷委員長：この報告書を読んでいて、「子どもが楽しくなる」という視点が見えない。子どもがどう思うのか、地域と関わって、どう成長するのか、子どもが地域と関わることでワクワクするような感覚が伝わってこない。もっと、子どもが地域との関わり、人との関わりの中で、大きく成長するというところを記載するべきである。子ども目線で見たら、どう変わるのかというところが必要である。

數本委員：フォーラムの報告にも「１５歳は地域の担い手」と記載していた。中学校１年生と３年生では、発達段階としては大きく違うと感じている。前任校では、小学校のお祭りに中学生がボランティアとして参加していた。子どもたちも社会の担い手であり、特に中学生は地域の担い手として活躍することで、自己有用感や自己肯定感の高揚につながることを、視点３に記載するとよいと考える。

水谷委員長：コミュニティ・スクールになって、地域と関わることで、子どもたちが「おもしろい」「おもしろくなる」ということを、記載した方がよい。

今野委員：地域や地域の人と関わることで、学びの喜びが広がったり、体験したりすることで成長していくことを表現できればよいと感じる。

事務局（田辺）：体験を通して成長することや地域の方々や異年齢の人との関わりの中で大きく成長することを子どもの視点に立って記載していく。コミュニティ・スクールになることで、多様な学びが実現し、子どもの成長につながること、子どもたちがワクワクする取組につながることを記載するように修正を加える。

今野委員：p.25 の「地域で子どもを育む」の記載を、多様な学びの実現が可能であることや子どもたちがワクワクするような取組になることを記載していくとよいと感じる。そうなると地域学校協働活動の内容は視点２か第１章に移行するとよい。視点１では、教育振興基本計画の仙台カラーを前面に出し、多様な学びが広がり、子どもたちが楽しい取り組みであることにつなげていくことが大事であることを記載する。

視点２　地域による学校への「支援」から双方向の「連携・協働」へ　報告書(案)p.27～

水谷委員長：p.29 に「学校教育と生涯学習の垣根を取り払い」とあるが、これは教育委員会内部の問題である。「学校教育」と対比するのであれば、「社会教育」が適切ではないか。

島田委員：地域連携担当教員は重要になってくると思うが、先生方にとって、より大きな負担にな

るのではないか。

今野委員：学校では校務分掌に地域連携担当教員を役割として位置付けている。しかし、担任としてクラスを持っていたり、他の役割と兼ねていたりするため、実際には専任できるわけではない。そのため、教頭や主幹教諭とともに複数で対応しているのが現状である。

島田委員：コミュニティ・スクールを導入した場合、地域連携担当教員の負担が大きくなるのではないかと考える。

横山委員：スーパーバイザーの立場で言うと、学校とのやり取りや学校の窓口は教頭先生である。地域連携担当教員は授業で職員室にいない場合が多い。また残念ながら、地域連携担当教員の役割を自覚していない教員もいるのが現状である。支援を必要としている先生と関わることはあるが、地域連携担当教員が間に入ることはほとんどない。コミュニティ・スクールになることで、先生方の負担が減り、子どもたちに向き合う時間の確保につながるのであればよいことであり、仙台版としてそのようなコミュニティ・スクールを目指したい。

梨本副委員長：フォーラムの報告でも話したが、学校の事務職員が地域との連絡だったり、学校運営協議会の議題を整理したりするような事例があった。仙台版として、そのような任用の仕方は検討できないだろうか。

今野委員：事務職員の活用に関しては、小さい規模の学校であれば可能かもしれないが、現状としては、難しいと考える。

水谷委員：報告書の中に地域連携担当教員を記載したのは、これまでうまく機能していないため、今後キーパーソンになりうる存在であるから記載したのか。

梨本副委員長：自分が地域連携担当教員の重要性を話したが、現状を考えると難しいということもわかる。

數本委員：地域連携担当教員はコミュニティ・スクールのキーパーソンである。仙台では生徒指導主事やいじめ担当教員は授業を１０時間程度しか持っていない。そのため、専任としてやっていける。東京でのフォーラムの話の中で、同様に授業時数を少なくして、地域連携担当教員を配置している都市の事例を聞いた。また、可能かどうかわからないが、地域のコーディネーターは地域の人材であるが、学校のコーディネーターも教員ではなく、ＰＴＡ役員など学校と連携を密に行える保護者等でもできるのではないかと考える。

大内委員：私の学校は、健全育成協議会がしっかりしている地区である。学校に何か連絡があると先生からＰＴＡに連絡が入り、協議会会長や役員の方々と話を詰めて、運営している。コーディネーター役はＰＴＡでも可能であると考える。

水谷委員長：地域連携担当教員の役割は、地域との窓口か。それとも校内での調整役か。役割を整理する必要があると感じる。

事務局（田辺）：p.29 に事例として、地域連携担当教員の役割を示している。しかし、学校事情によっては、授業やクラスを持ちながらの対応であるため、なかなか機能していないという声も聞こえてきているのが現状である。

山川委員：私は学校支援地域本部事業に携わって１０年以上になるが、地域連携担当教員はほとんど機能していないことが多いと感じる。事例の中の（２）地域と関わる活動の集約と発

信という部分を一番期待しているが、難しく、ほとんど機能していないと感じる。ここに地域連携担当教員を乗せることは、報告書を読んだ方に大きな期待をさせてしまうことになる。生徒指導主事のように専任にするのでなければ、記載しない方がよいのではないか。

島田委員：これまで地域との連絡は教頭が窓口であった。コミュニティ・スクールが導入され、地域連携担当教員の役割がここに出てくるのであれば、専任教員であると期待してしまう。そうでないのであれば、記載しない方が誤解を生まないと考える。

事務局（田辺）：地域連携担当教員を専任にすることは難しいと考える。

數本委員：以前、校長会の教育課題部会で、地域連携について、アンケートを行ったことがある。地域連携担当教諭の年齢や着任してからの年数等を調査したところ、年齢が若い先生から地域の方々と話がしやすいような年齢の先生まで、着任して間もない先生から長く在任する先生まで学校事情によって様々であった。一律の活用は難しいと考える。

事務局（丸山）：地域連携担当教員の役割を再確認する意味で記載した。現実的には、地域との学校の窓口は管理職であり、地域連携担当教員は校内の先生方の地域とつながりたいと思っているところを紹介するような校内でのコーディネートをしている。

今野委員：地域連携担当教員の役割を再確認することは必要である。仙台には嘱託社会教育主事制度があり、市内の学校に嘱託社会教育主事は約２００名在職している。その先生方を地域連携担当教員に充てている学校は多い。その先生方は、担任等の役割を持っており、時間的には制限されるが地域とつながろうと一生懸命にやっている。

水谷委員長：地域連携担当教員に関する記載は残すが、過度の期待を抱かせないためにも、コミュニティ・スクールと関連付けないようにする。または、校内での調整を主とした業務とするとよい。

視点３　『育む子ども像』を意識して　報告書(案)p.30～

梨本副委員長：「意識して」という表現は誰が目指すのかわからないところがある。「共有して」という表現ではどうか。また、「育む」というと大人目線なので、「目指す」という表現ではどうか。「地域の人がこうなりたい。」「先生方がこうしたい。」「子どもたちがこうなりたい。」といったように、みんなが目指すことができるのではないか。小学校と中学校では発達段階で目指すものは異なると思うが、共有することはできると考える。そのため『目指す子ども像』の共有という表現ではどうかと考える。

視点４　学校の中に地域の人が集まる『場』を　報告書(案)p.31～

千田委員：文章の中身はそれほどこだわらない。どうやったらうまく立ち上げられるかをすでに考えている。

山川委員：西中田小についての箱囲みの事例の中に「放課後子ども教室」の紹介を入れた方がよい。放課後子ども教室が無い地域の地域住民には分からないと思う。

横山委員：「子どもたちが楽しい」という観点がないという発言があった。ここでいう『場』は地域の方が集まる場ではあるが、子どもたちも入ってくると思う。子どもも含まれるという

ことを記載した方がよい。

梨本副委員長：横浜に視察に行った際にも、子どもたちが学校運営協議会の場で発言するといった場面もあると聞いてきた。子どもが地域との関わりを持てる『場』にもなればよいと考える。

山川委員：中学生は地域の役に立つことも大切だが、その『場』に戻ってくる、顔を出すだけでもよいと考える。先日、中学生が来たが、中学生はとても忙しい。ちょっと息抜きに来る場、遊びに来る場になっていればよいのではないか。そこで、地域の方々とコミュニケーションができればよい。子どもたちにとっても楽しい『場』、地域にとっても楽しい『場』であればよいと考える。

視点５　既存の組織・会議体を一体化へ　報告書(案)p.32～

水谷委員長：**p.32 の図、Before と After の関係は、これでよいのか。**

事務局（丸山）：すべての会議体が一体化するということを図にした。

今野委員：学校評議員会は設置しなくてもよいのか。

事務局（丸山）：学校運営協議会を設置した場合、学校評議員を置かなくてもよいということは文部科学省にも確認済みである。

事務局（田辺）：複数回の学校運営協議会の中で、ある回では学校評価を行ったり、別の回では学校支援についての話し合いをしたりすることは可能である。学校運営協議会が包括した会議体になり得ると考えている。そうなることで、会議体の精選になり、学校の負担軽減につながると考える。

梨本副委員長：決めすぎるのは問題があるが、事例として会議の議題等を提示しておくことも必要である。

島田委員：複数の会議体が一体化することはとてもよいことだが、この図を見ると、これまでの委員のすべてが学校運営協議会の委員になるのではないかという誤解を生むと考える。組織の代表者ではなく、あくまでも人を選ぶことが大事である。

水谷委員長：学校評議員会や学校関係者評価委員会、地域教育協議会の機能を包括した会議体が学校運営協議会であるということが分かるように表現することが大事である。

おわりに　p.33～

水谷委員：「おわりに」はすべての総括となる部分であり、短い方がよい。また、「未来を担う子どもたち」を強調してしまうと今を生きている子どもたちはどうでもよいのかということになってしまう。更に、最後の段落だが、何を育てていくのかが見えない。

事務局（田辺）：整理して、文章を短くする。

（４）全体を通して

今野委員：p.22 までの部分はもっと短くする。アンケートの意見等を資料編に移行し、文章で表す。具体的には p.11～12 と p.19～22 は資料編に移す。このままでは検討事項に読み進むまでに疲れてしまう。三分の一程度になればと考える。

水谷委員長：読んでいると主語がない文章が多い。おそらくその主語は「学校」であると思う。違和感があるので、修正を願う。

山川委員：p.16の下から8行目、ここだけ「地域住民の皆さん」という言葉が入っている。「地域住民」でよいのではないか。修正を願う。

水谷委員長：「いただいている」と言う表現も時々見られる。修正を願う。

梨本副委員長：p.2の図1はあまり成果として見えてこないので、あえて掲載しなくてもよいのではないか。また、p.8の1行目に「子どもたちの社会性やコミュニケーション能力の高まりも見られてきている。」とあり、成果があるのであれば、ここにグラフ等があれば、その裏付けになると感じる。仙台市の教育課題を考えたときに、いじめの問題があるが、その部分の記載がもっとあってもいいのかと考える。具体的には、p.17に教職員にとってのメリットにも記載があるが、「地域の協力により子どもと向き合う時間の確保ができる。」という部分につながり、いじめ等の問題にもきめ細かく対応することができるようになると言うことではないかと思う。または、子どもが様々な地域の人たちや異年齢の人との交流の中で、コミュニケーション力を高めたり、自己有用感を持つことにつながると言った表現を記載することができるのではないか。私自身も迷っているところである。事務局で検討して欲しい。

事務局（田辺）：事務局としても検討していくが、コミュニティ・スクールが全ての課題解決につながるわけではない。期待はあると思うが、あまりに大きな期待を持たせるのもよいことではないと考える。ただ、課題に対して、学校・家庭・地域が一緒に考える場の設定にはなると考える。p.24に事例として「いじめ防止ミーティング」については掲載している。今後、作成する予定の「導入の手引き」の中で、熟議の議題として、事例を挙げていく中で、いじめの問題もひとつの熟議の議題として挙げていく。

山川委員：p.17の「地域人材を活用した・・・」の表現は上から目線である。「地域人材に支えられて・・・」という表現ではどうか。修正を願う。

（5） その他

事務局（田辺）：元に戻って申し訳ないが、視点3　『育む子ども像』を意識しての表現についてだが、これまで本市の学びの連携事業では、育む子ども像という表現を使ってきており、学校にも保護者・地域にも浸透してきている。「目指す」という表現は、中学校で目指す子ども像となり、中学校だけで切れてしまうかと感じる。「育む」であれば、ずっとつながってくイメージがある。

水谷委員長：「育む」という表現は、大人や外から子どもを育むという外的なイメージがあるが、子ども自身が育つというような書き方をしていただければ問題ない。視点3は『育む子ども像』の共有とする。

水谷委員長：これまでの10回の検討委員会の中で、活発な意見交換が行われ、議論は尽くされたと感じる。今回で会議は終了したいと考えるが、いかがか。

委員一同：同意。

水谷委員長：今回の意見を反映して、報告書を作成いただき、今後はメールでのやりとりで修正を行っていく。最終的には、事務局と委員長、副委員長で確認をしていくという予定でよろしいか。

委員一同：同意。

４　事務連絡

・今後の予定について

１月中に報告書を完成し、教育長へ報告する。

・生涯学習課から

地域学校協働本部事業の説明

統括推進員の紹介

５　閉　会

◆**終了時刻**：午後４時５１分

◆**報道機関**：河北新報社

◆**傍聴者：なし**

この議事録について、会議の内容と相違ないことを認める。

令和 2 年 1 月 28 日

コミュニティ・スクール検討委員会

署名委員　數本芳行　印